

『ド ア の 鍵』

植 木 利 彦

岡山理科大学教養部

(昭和59年9月27日 受理)

I

『ドアの鍵』は『長距離走者の孤独』、『土曜の夜と日曜の朝』に続くノッティンガムの労働者の世界を描いた作品であるが、同時にシリトー自身の自伝に近いもの、あるいは彼の三世代に渡る家系の年代記とも考えられる。そしてまたこの作品は前二作の作品の主人公達の社会に対する反抗精神を培ってきた思想形成の過程を明らかにすると共に、より大きなシリトーの世界へ続くドアの鍵ともなっている。

『長距離走者の孤独』が主人公の不平等な社会に対する個人的、盲目的、暴力的な反抗を描いたものであれば、『土曜の夜と日曜の朝』は『長距離走者の孤独』の主人公の反社会的なそのような反抗を経て、やはり個人的なものではあるが、非社会的な精神的反抗へと変化していく過程を描いたものであった。しかしそれらは飽くまで個人の世界であって、主人公達が社会に対しどのような不満を抱いていても、どのような形で反抗しても、それは社会のかかえている問題の解決とはなりえなかった。問題を根本的に解決するためには問題の本質を理解し、社会に不満を感じている人達の力を結集し、問題をかかえた社会そのものの改善に取り組まなくてはならないのである。

『ドアの鍵』は、上記のような観点からみると、より深く社会の実状を認識し、個人の世界から集団の世界へ、個人的闘争から組織的闘争へと発展していくシリトーの二つの世界をつなぐ橋渡しの作品といえる。

この小論では主人公ブライアンのノッティンガムの社会からの脱出と回帰に的を絞って、新しい世界、『ウィリアム・ポスターズの死』や『燃える樹』、にいたる過程を探ってみたい。

II

主人公ブライアンは物心ついた頃から1930年代の不況の時代を経験しながら成長しなければならなかった。癪癪持ちの父親ハロルド・シートンは、彼の仲間の労働者達と同じように失業中で、一家はわずかな失業手当で暮らしている。家賃を滞らせての度重なる夜逃げ、無料の給食センターでの食事、破れた衣服、ごみ山をあさっての屑拾い、タバコ一箱を買う金がないためにおこる両親の大喧嘩、隣人の生活苦による自殺、彼の置かれている

環境は「生活する」というには余りにも悲惨な環境である。彼の一家の状況は生活しているのではなく、正に生残るために環境と闘っているといっても過言ではない。彼等と同じような状況に置かれている者達にとっては生き続けることが問題であって、その外のことは問題外となる。“Doddie was absolutely convinced that it was right to go poaching in order to get food. It was more a question of good and evil.”¹⁾ ハロルドは食料品店の主人を騙して食料品を手に入れ、その後逮捕された時、“‘If I’d ‘ad a job to work at I wouldn’t a done this. But when yer kids ain’t got no grub what else can you do?’”²⁾ といわざるをえない。そして従兄のバートの家庭では、“they often had to find their own food, which meant putting themselves in the way of fences to be climbed, palings and barbedwire having good enough reason for being there”³⁾ つまり、盗みや威し、狡猾さや騙しなどの世俗的な意味や観念といったものは「生きる」という重大問題の前ではその影も薄い。彼等、貧しい者にとっては生きることはルールのない闘いである。飢との闘いである。そのような生活を強いられている者達に世俗的な規律や法を冷酷に適用することこそ彼等の側からすれば馬鹿げたことなのである。それは彼等に何も食べずに死ぬということであり、また彼等をいじめる手段としか理解できないのである。しかし一方では、法を守り、仕事を持ち、食べ物に事欠くことなく豊かな人間的生活を送っている者も彼等の住む同じ社会の中にいるのである。この不平等、この歴然とした事実がブライアンの意識を捕らえないはずがない。彼はこの不平等、この矛盾を小説『レ・ミゼラブル』の一節を引用して、次のように理解している。

Good and bad were easily separated. On one side were Thenardier and Inspector Javert—both against a society of equals because Thenardier needed the rich to thief from, and Javert the poor to persecute. On the other side were Fantine, Gavroche, Jean Valjean, Marius Pontmercy, Cosette—the weak, the young, the revolutionaries—those who could not live with the former in their midst.⁴⁾

前二作の主人公、スミス少年とアーサーはこの社会の不平等を日常の生活体験の中から感じとって、不平等な社会に対して個人的な反抗を試みたのであるが、ブライアンはそのような社会に憤怒しながらも、そのような社会の前に頭を下げざるをえない労働者の資質、あるいはその原因に目を向けている。といっても、幼ないブライアンにその原因を深く追求することは無理で、年令的、精神的成長を持たなくてはならないが、少なくとも他人に頼らなくても済む生活手段を持つ必要性は認識しているようである。ブライアンは従兄のバートの意見に同調するが、バートは次のように言う。

“...That’s why I want to get an ’ut when I grow up, because then you can get your own snap and you don’t need to go to a factory or some new ’ouses to get a job because you can grow all your owu grub. And then if you do

that you never 'ave owt to di wi' gettin' the dole...⁵⁾

ブライアンのこの漠然とした認識は母親ヴェラによってより具体的に説明される。彼女は女彼の父親マートンもハロルドと同じく字も読めぬ無学な労働者であるが、彼等二人の生活力の差異の大きさを次のように認識している。

No one had ever been out of work at the Nook. Her father and brothers had been blacksmiths either at the pit or in private forges where there had always been labour enough...tangible amounts of food to be seen...a ton or two of pit coal standing in the yard...But Seaton...was a duffer and numbskull...pitted inside a city at a mere labouring job when thousands of such men were being sent home day after day because there was nothing for them to do, often to be laid off altogether.⁶⁾

単なる賃金労働者はいくら働く意志があっても仕事がなければどうにもならない。賃金労働者は社会の経済状態によって仕事にありついたり、失業するといった非常に不安定な生活を強いられるのである。彼等は丁度飼主に餌をもらうペットのようなもので、飼主の気分次第で餌にありついたり、ありつけなかったりするのである。一方、マートンのように鍛冶屋としての技術を持つものは豊かでなくとも、食うに困ることはないのである。この事実をヴェラはハロルドと彼の兄弟達を比較して更に強く認識している。

....she wondered again why Harold was a numbskull, while his five brothers stood apparently on another level, in the firm grip of good jobs. One was a shoemaker, two were upholsterers, the fourth a lace-designer. Ernest managed a draper's shop in town. Harold Seaton, a labouring numbskull, earned thirty-eight bob a week, when he was lucky, at a tannery and skin-yard.⁷⁾

専門職というのは単に技能を身につけているというだけでなく、一端技能を身につければ、誰からも仕事について指図されることもなく、自分自身の世界に生きられるのである。そのような人間は自分の生活を自分で支配する力をもつのである。この力こそ幼ないブライアンの目にヌークの世界を天国のように映しだした源なのである。いいかえれば、他人に使われるのではなく、自分の技能と才覚で自分の仕事をやり、生活を守ることが失業手当の生活から抜け出る方法なのである。この技能を身につけぬ限り、賃金労働者の未来に待ち構えている失業手当の生活は避けがたいのである。しかも一端その世界に落ちた者は、ハロルドのような働き者であっても、ときたま怠け心がおこって、やっと手に入れた仕事も継続的にやることは難しいのである。“Work had always been blood in his veins but, since his life-sentence to dole and means test he didn't find it so easy to climb down from the scrapheap.”⁸⁾ 失業手当は一種の麻薬のようなものであり、徐々に人間の羞恥心を、誇りを、向上心を、忍耐力を蝕んでいく。その世界は決して脱出できない蟻地獄のような世界である。父親のそのような実状を知っているブライアンは“dreaded the

return of his father's meanstest fate on himself."⁹ 成長するにつれて増々強く彼の意識を捕らえるこの不安は、ロビンスン社のボイラー室の煙道を掃除している時、真暗な狭い煙道の空間がいっそう狭まってくるように感じる不安によって象徴されている。

Now and again in his underground burrow he put down his spade for no reason and stared open-eyed, unseeing at the darkness, too aware of the roof an inch or so above his head, and the wall on either side nudging at his elbows. The sensation that it was getting smaller struck him like a knife across the eyes: he lay flat on his belly and drew his arms in, stiff and silent to create the illusion of more space around...¹⁰

彼自身の将来に対する不安。この不安を覚える意識こそ、彼が前二作の主人公達と大きく異なる点である。スミス少年やアーサーは将来に対する不安を覚え、その不安を解消するために何をなすべきかを模索し、思い悩んだのではない。彼等は、夢のない現実世界で、彼等の夢を殺していると感じる不平等な社会に、あるいは強者が弱者を支配している社会に対して一匹狼的な存在として利己的に行動し、あるいは反抗し続ける意志を表示したのみである。彼等の生きる世界はやはりノッティンガムの世界であり、彼等の意識は彼等の置かれている世界の中で精々楽しくやっていくことに向けられている。一方、何の技術も身につけず、ノッティンガムにいるかぎり、失業手当の蟻地獄に落ちるかもしれないというブライアンの将来に対する不安は、恐怖に近い感情にまで高められていながら、決して彼を他の主人公達のような自己満足的、時には自暴自棄的とも思える行為や極端な考え方に走らせるのではなく、ノッティンガムという腐った世界から、失業の不安から抜け出るチャンスを虎視眈々と狙わしているのである。

彼の入隊は、シートナー族の考え方、あるいは歴史的観点からみれば、馬鹿げたことかもしれないが、軍隊はブライアンが願っていたノッティンガムからの脱出だけでなく、彼の失業の不安を解消する手段、すなわち特別な技能を身につけさせてくれる場所でもあった。彼の研澄まされた意識は特別な技能を必要とする通信兵になることを彼に選ばせたのである。

....he worked hard training for his sparks badge, an attainment which would mean more pay and the satisfaction of having a real trade the first time in his life.¹¹

高等教育を受けられるような環境に置かれていないブライアンは、専門技術を身につけるために、貧しい者達を利用し、搾取し続けている憎むべき英国を守っている軍隊そのものを利用したのだ。

次に彼がなしとげなくてはならないことはノッティンガムからの脱出であるが、この脱出は彼の豊かな想像力に彼の置かれた環境が呼応して、幼ない頃より彼にとりついた宿命的なものといえる。

....he played at a recently discovered trick of pressing both hands on his ears, half-blocking the immediate wild yells of spinning kids to hear instead a far-off echo or reflection of it. He completed the illusion by closing his eyes, and the noises of this distant eldorado, though appearing to come from a similar paddling-pool and river seemed a haven of enjoyment....¹²⁾

幼ないブライアンにとって、それは実体のはっきりしない、単に彼の住む世界とは異なる世界として漠然と把握されているにすぎないが、年とともに彼に理解されてくる彼の置かれている環境が増々彼にこの夢の実現を希求させたのは不思議なことではない。金がないために毎日のように繰返させる両親の喧嘩、——“It went on, stupid, futile, hopeless. Brian listened outside the window, each word worse than a dozen blows from Mr. Jones’s fist.”¹³⁾——貧困、無学、無知、騒音、失業、これらからなる世界が彼の住んでいる世界なのである。

幼ないブライアンにとって、このような世界からの逃避は想像の世界か、祖父マートンの家か、あるいは本の世界しかなかったのである。“‘I’d like to go to Abyssinia,’ he said. ‘I want to goo a long way.’”¹⁴⁾ は彼の強い心の願望の現われであり、祖父マートンの家は彼にできる唯一の現実からの逃避場所である。ヌークの家が天国のように描かれ、成長した後もブライアンがヌークの家にノスタルジックな感情を覚えるのは当然のことである。彼の読書癖は現実世界からの逃避だけでなく、自由を求めて闘い続けてきた人々が沢山いることを、そして彼も自由を求めるならば、努力しなければならないことを教えた。

....all night long he listened to the tapping and whispers that came from the granite floor, heard the patient scraping and scratching of freedom, was shown that even dungeons and giant prisons were unable to keep men in forever....¹⁵⁾

しかし彼はこのことを容易に学んだわけではない。彼は屑拾いを何ヶ月もやり、一ペニー、一ペニーを貯えてやっと『モンテ・クリスト伯』を買ったのだが、“‘You’re bloody-well silly about books....’”, “‘You stand need to spend half a crown on books when you ain’t got a bit o’ shoe to your feet....’”¹⁶⁾ その日の食べ物にも事欠き、生きることが重大問題である家庭にとって、腹の足しにもならない書物に金を使うことは言語道断なのである。それはほめられるべきことではなく、しかられて当然の行為と理解しなければならないのである。

He sat by the fire while they drank tea, trying to force back the sobs, difficult because he saw too easily how he had done wrong.¹⁷⁾

更にブライアンは本を読むことに関して次のように感じている。

Maybe there *was* something shameful in reading books, in imitatig French, in writing, in drawing maps, that he was putting himself beyond their reach. He couldn’t quite grasp or understand the sense of betrayal, though its connec-

tion with books had been clearly seen and picked out by the others as his most exposed nerve.¹⁸⁾

書物など縁のない家庭にあって、字を読んだり、書いたりすることは、そうしたことできぬ家族の者達がいる世界からの脱出であり、彼等との訣別と考えなければならないブライアンの心痛は察して余りあるものである。

しかしながらブライアンはノッティンガムからの脱出を諦めたわけではない。諦めることは、父親の生活と同様、彼の生活も失業手当を当にする生活になるのであり、彼の子供もまたそのような生活を強いられるのである。それは貧困と失業手当という牢獄に閉じ込められること以外の何ものでもない。何が何でもこの牢獄から抜け出さなくてはならない。そんな折、ポーリンから彼の子供ができたと聞かされた時、“Even going into the air force hadn’t wrenched the nuts-and-bolts of his world as loose as this piece of information. The picture of his life was shaken, sent spinning like an iron Catherine-wheel in front of his eyes.”¹⁹⁾ 自由を求める多くの男達が、思わず知らず落入る罠に彼も落込んだのである。責任という足枷が、がっちりと彼を捕らえて、ノッティンガムの世界へ彼を引きずりこもうとしている。

このような苦境の中にあって、彼は夫としての責任を果たし、かつアビシニアによって象徴される彼の夢、ノッティンガムからの脱出、を果たすのであるが、今回も彼は英国軍隊という親近感を覚えぬ組織をまんまと利用するのである。

But he hadn’t wanted to keep out on it (i.e., army), because that would mean staying in Nottingham when he wasn’t sure he wanted to any more. Not that he was afraid to desert either, but felt he would be more of a deserter in letting himself be called up than roaming like an outlaw around the night streets, and in fact might miss something if he didn’t let himself go for once where the wind took him.²⁰⁾

彼は軍隊の給料で妻子を養い、軍隊で特殊な技術を身につけ、軍隊を利用して海外への脱出を計ったのである。

ブライアンにはスミス少年やアーサーが徹頭徹尾反抗した社会を徹頭徹尾利用しようとするしたたかさがある。彼等のしたたかさは表裏一体をなすものであるが、ブライアンのしたたかさは、一見社会的とも見えるが、既存の社会を食いつぶす、より巧妙で、より不気味なしたたかさといえるだろう。

III

個人主義者でもあり、理想主義者でもあるブライアンは嫌悪する社会をまんまと利用して、牢獄のようなノッティンガムの世界から脱出した。彼のアビシニアはマラヤであった。しかし彼の逃げて来たマラヤの世界は脱出したノッティンガムの世界と違った世界であっ

ただろうか？ ポーリンの代りにミミがおり、工場の上役の代りに上官がおり、労働者相手の酒場の代りに兵隊相手の酒場があり、貧しい人々が細々と生活を営んでいる。むしろブライアンは軍隊という組織の一員として、マラヤの国民を支配する側にいるのである。そしてマラヤの国民は日本や英国の不当な支配のもとで、ノッティンガムの住民と同じように、屈辱を味わい、貧困に苦しんでいるのである。また彼と同じく兵役についている仲間にもノッティンガムのロビンスン社の労働者と同じく変わらない、現状に満足した連中もいるのである。准尉のジョージはいう。“‘I’ve got fair pay, grub, clothes and a bed to sleep in. In return I do some work (only a little though, he winked) and lose my independence. You can’t have it fairer than that, can you, lad?’”²¹⁾ 彼が妻子と別れて出て来たマラヤにも新しい世界はなかった。彼の夢は彼がたたく電鍵の放つ電波のように闇の空の中へと吸い込まれていくだけである。

ノッティンガムの世界とちっとも変わるところのないマラヤの世界で彼をひきつけているのはグーノン・バラットの山である。

The isolation of it reached to something in himself, the solid independent greyness beyond heat and cold, halfway into another world that attracted him, in a few seconds, more than anything else ever had. The far side of the moon seemed as familiar as his own cousin compared to this new dimension of life glimpsed far off beyond the water and coastal swamps.²²⁾

この人を寄せつけない神秘的な山は、彼が幼ない頃より夢見てきたあの遠い世界、理想の世界、に入る手がかりとなるものを与えてくれるように彼には思えるのである。何故ならその頂は彼の夢見るあの世界に届いているように見えるから。だが密林に覆われたグーノン・バラットは、あの別世界への入口のように見える頂にたどり着くのに非常な忍耐と努力を要求するのである。従ってこの山に登ることは、ブライアンの求めるあの世界に彼自身が入れるか否かの試練ともいえるのである。それ故にブライアンは“wanted to ascend through its wet forests....to test his strength on its steep incorrigible slopes.”²³⁾ つまり、グーノン・バラットは不平等な現実社会とその理想の世界との間に横たわる障壁——現実社会の中で目に見えぬ不平等を生みだしている階級間の障壁、人間を閉じ込められた枠から外へ出さぬ無知、無学、貧困という檻——なのである。その障壁を乗り越えれば、その向こうに新しい世界、彼の未来が存在しなければならないのである。それはもはや彼の夢想というより妄想に近いものである。

....he knew he would still go to Gunong Barat, which, though a self-erected obstacle, had to be crossed nevertheless because he had created it in his own mind as a stepping-stone to the future. In any case, Gunong Barat meant the jungle....an unknown flimsy world meaning something else, so that it would teach him perhaps whether or not he wanted to enter the real world it some-

times appeared to be screening. Without the expedition there would be no future, only a present, an ocean of darkness behind the thin blue of the day, a circle of bleak horizons dotted by fires burning out their derelict flames.²⁴⁾

明るい未来を期待できぬブライアンにとって、明るい未来を見出すことは、この人生が生きるに値するものとなるのである。そのためには明るい未来が存在することを自らの努力によって確かめなくてはならない。もし努力し、忍耐して登頂したグーノン・バラットの山頂に明るい未来と同じように見える素晴らしい世界が展開されるのであれば、この現実社会においても彼が努力し、忍耐を重ねた果てには彼の理想の世界が彼に獲得されえるはずである。だがこれは想像力豊かなブライアンが考え出した夢である。つまり、現実を無視した理想主義者ブライアンの想像力が生みだした彼の個人的な夢にすぎない。ノットマン伍長はブライアンの登山について、*“Of course it’s different with you: you’re just an idealist, meaning you give in to worldly values without dirtying your hands on them.”*²⁶⁾ という。ブライアンは矛盾に満ちた不平等な現実社会に身を投げ入れ、目に見えぬ階級間の障壁や抑圧を生みだす要因を乗り越えたり、除去するかわりに、グーノン・バラットの密林を現実社会の矛盾や不平等に置換え、彼自身がこれらの障壁や抑圧を生みだす要因を乗り越えたり、除去し、あの世界にたどり着く能力があるか否かを試そうとしているのである。これは理想主義者のよくやる一種の逃避、あるいは自己満足にすぎない。

あれほど神秘的、魅惑的に見えたグーノン・バラットの登山は彼に一体何を教えたのか？ 繁茂する草木は彼の行く手を遮り、滑りやすい濡れた土は彼の足をすくい、険しい崖は長い距離を迂回させた。これらの障害は外観は違っているが、本質的には現実社会における不平等や矛盾、あるいは搾取と何ら変わるところはないのである。しかし、現実の社会においては、彼が努力すれば、その理想の世界がはるか彼方であろうと、彼の努力の一步一步は彼自身の人間的進歩、あるいは彼の生活の改善、ひいては理想の世界への接近となるだろう。一方、この密林での登頂の努力は、彼自身の、あるいは彼の生活のいかなる面において進歩、改善の結果をもたらすのか？ それは皆無ととってもいい。

There’s no point in climbing a mountain unless there’s some purpose behind it, like to make a map, or get food, collect wood or stake out a place to live, he thought....²⁶⁾

人間は理想を求めるならば、空想の世界に没頭するのではなく、この現実の社会の中で、より実的な目的を持って努力しなければならない。実的な目的を持たぬ努力は、単なる徒勞であり、何ら得るところはないのである。いつまでも夢想の世界に留めることは、夢想の世界の魔力に酔わされ、現実の社会を見失う結果になる。ちょうど外の光を通さぬジャングルの中で大木が朽ちていくように、自分の固意地な夢の中で朽ちはてざるをえないのである。

He could easily understand how the jungle would drive you crackers if you

had to stay there too long; how its great forest-mind could eat you up with the dark grin of possession.²⁷⁾

ブライアンとは違って、現にこの不平等な世界の中で個人の理想のためではなく、自分達の住む社会のために、後に続く世代のために理想を求めて努力し、闘っている人々もいるのである。ブライアンはジャングルの中で以前は日本の支配に反抗し、現在はイギリスの支配に反抗し続けているゲリラ兵と遭遇した。彼等は何時終るともしれない反植民地運動に生命をかけ、民族の独立という実質的な目的を持って闘い続けているのである。彼等一人一人の力は微力であるが、彼等は団結することによって、古い巨大な大英帝国を相手に闘いを展開しているのである。彼等は、彼等と歴史的、物理的に結びついたマラヤという抑圧された世界の中で、彼等自身の民族の未来を求めて、精一杯の努力を払い、忍耐し、理想のために闘っているのである。ならば、ブライアンも彼と歴史的、物理的、心情的に結びついたノッティンガムという現実の社会で、彼を、彼の家族を、そして彼の仲間を抑圧してきた世界と闘うことが必要なのである。その闘いこそ、理想の世界に通じる道であり、より現実的、実質的な目的を持った努力といえるのである。

....it was the first time he realised that he had a past, and had not evolved out of a dream.²⁸⁾

ブライアンのノッティンガムへの回帰、つまり、マラヤとの別離は、単なる彼の空想の世界との別離を意味するだけでなく、彼の少年期からの離脱、個人的な理想主義からがちりとノッティンガムの大地に足を降ろし、彼の仲間と共に歴史に対して責任ある人間としての新たな旅立ちを意味するものである。“Tell him to put me down for the union as well.”²⁹⁾ 彼は一人前の人間として新たに社会に参入する「ドアの鍵」を手に入れたのである。

IV

すでに見てきたように、ブライアンの行動は全て個人的動機に基づくものであり、彼のみが失業手当の生活からの脱出手段を手に入れ、彼のみがノッティンガムの社会から抜け出たのである。彼の個人的な努力によって、彼自身の救済はなされた。しかし彼の仲間や彼の父親ハロルド・シートンのような労働者はやはりノッティンガムという社会の中で不平等に苦しみながら生き続けることを強いられているのである。また彼の脱出した先のマラヤにおいても、マラヤの国民は他民族の支配のもとで苦しんでいるのである。依然として世界のあらゆるところに不平等がはびこり、支配する者と支配される者とが存在し続けるのである。矛盾に満ちた社会制度は依然として改善されずに存在しているのである。それはそこに生きる多くの者にとって夢のない社会なのである。この地上の何処を捜してみても、ブライアンの理想とするような世界は存在しないのである。ならば、矛盾に満ちたこの現実社会を理想の世界に変える以外に道はない。そのためには個々人が個人的な主義

・主張に走るのではなく、抑圧された弱い人々が協力し合って、より大きな目的のために闘うことが必要なのである。それは気の遠くなるような時間と忍耐を要するものであろうが、着実な現実社会の改善であり、現実の世界への力強い一歩であり、明るい生きるに値する未来を生み出すのである。

『ドアの鍵』は、このように個人的な世界から組織的、計画的な集団の反抗の世界へと飛躍していくシリトーの二つの世界を結ぶ橋渡しの作品である。

Notes

- 1) Alan Sillitoe, *Key To The Door* (London: W.H. Allen. 1978) pp. 169-70
- 2) *ibid.*, p. 21
- 3) *ibid.*, p. 91
- 4) *ibid.*, p. 193
- 5) *ibid.*, p. 108
- 6) *ibid.*, p. 42
- 7) *ibid.*, p. 52
- 8) *ibid.*, p. 196
- 9) *ibid.*, p. 250
- 10) *ibid.*, p. 251
- 11) *ibid.*, pp. 399-400
- 12) *ibid.*, pp. 9-10
- 13) *ibid.*, p. 132
- 14) *ibid.*, p. 101
- 15) *ibid.*, p. 176
- 16) *ibid.*, p. 175
- 17) *ibid.*, p. 176
- 18) *ibid.*, pp. 194-5
- 19) *ibid.*, p. 389
- 20) *ibid.*, p. 218
- 21) *ibid.*, p. 271
- 22) *ibid.*, p. 235
- 23) *ibid.*, p. 272
- 24) *ibid.*, p. 303
- 25) *ibid.*, p. 273
- 26) *ibid.*, p. 344
- 27) *ibid.*, p. 351
- 28) *ibid.*, p. 437
- 29) *ibid.*, p. 444

On Key To The Door

Toshihiko UEKI

*Department of General Education,
Okayama University of Science
Ridai-cho 1-1, Okayama 700, JAPAN*

(Received September 27, 1984)

In *The Loneliness of the Long-Distance Runner* and *Saturday Night and Sunday Morning* Alan Sillitoe describes personal resistance against society having many contradictions and inequalities. But in *Key To The Door* he says that personal resistance against society may bring a personal relief or self-satisfaction, but not improve society itself. He feels, instead of personal resistance, that cooperation of oppressed people in their struggle against the dominant factors producing contradictions and inequalities will bring a new and ideal society.

In this paper I want to investigate the process developing from the world of personal resistance to the one of the cooperative group resistance both of which are Sillitoe's main novelistic worlds.